渋沢栄一と一万円札

生い立ち

渋沢栄一は、1840年に現在の埼玉県深谷市に生まれました。家業の畑作や藍玉の製造販売、養蚕などを手伝いながら、父親から学問の手ほどきを受け、いとこの尾高惇忠（おだかあつただ）からは論語などを学びました。尊王攘夷思想に影響を受けた渋沢は、いとこたちと高崎城乗っ取りの計画を立てたものの、中止。ふるさとを離れて京都に向かいます。

京都では一橋慶喜（ひとつばしよしのぶ）に仕え、実力を認められていきます。27歳の時に、慶喜の実弟である徳川昭武（とくがわあきたけ）の随行として、パリの万国博覧会を見学。欧州諸国の実情を広く見聞し、日本の近代化の必要性を感じました。大政奉還後に帰国した渋沢は、日本初の合本（株式）組織「商法会所」を静岡に設立。その後、明治政府で大蔵省の一員として、新しい国づくりに敏腕を振るいました。

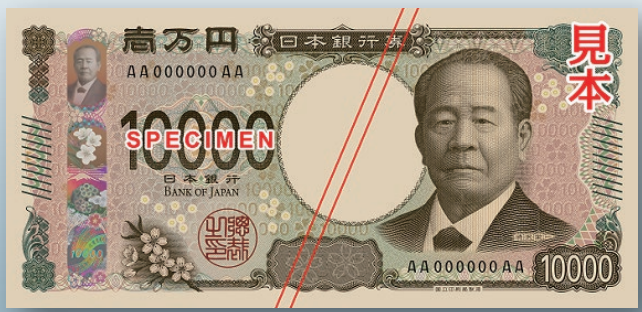
その後、渋沢は大蔵省を辞して、一民間経済人として活動を開始。最初に着手したのが「第一国立銀行（現在のみずほ銀行）」の設立です。第一国立銀行を拠点に、株式会社組織による企業の創設や育成に注力し、社会公共事業、福祉・教育機関の支援にも取り組みました。1931年、多くの人に惜しまれつつ91歳でこの世を去りました。

紙幣肖像の選定

財務省は、以下の3点を踏まえた、明治以降の人物から紙幣の肖像を選定しています。

1. 偽造防止の観点から、なるべく精密な写真を入手できること
2. 肖像彫刻の観点からみて、品格のある紙幣にふさわしい肖像であること
3. 肖像の人物が国民各層に広く知られており、その業績が広く認められていること

その中で、「傑出した業績を残し、新たな産業の育成といった面からも日本の近代化をリードして、大きく貢献した」という理由で渋沢栄一を新一万円札の肖像として選定しました。新一万円札の裏面には、「赤レンガ駅舎」として親しまれた歴史的建造物（重要文化財）である東京駅（丸の内駅舎）が描かれています。



出典／国立印刷局ホームページ